

一球にこめた思い

瀬戸内市立牛窓東小学校

六年生 大濱 英奈

「プレイボール。」

球審の声とサイレンの音が響きわたる中、私はマスカットスタジアムのマウンドに立っていた。緊張で飛び出しそうな心臓。青空とスタンドの大観衆が目に見え、深く息を吸い、右手のボールをにぎりしめると、少しずつ落ち着いていくのが分かった。やっぱり私は野球が好きなんだ。

さかのぼること約一ヶ月前、私はチームメイトとベースボールフェスティバルに参加していた。そして運命のチラシをゲットしたのだ。そこにはこう書いてあった。「夏の岡山大会決勝の始球式に小学生バッテリーを募集」出たい！思わずそう思ったけれど、すぐに、ちょっとはずかしいかとも思った。一緒

にいた監督が、

「英奈ちゃん季那ちゃんて応募してみたら。」

と言ってくれたけど、季那ちゃんもはずかしいと言って目をそらした。

私は帰り道も考えていた。やってみたい思いとはずかしさ、二つの気持ちの間をゆらゆらしていた。それに、バッテリーとなるとキャッチャーの季那ちゃんの気持ちも大切だ。家に帰ってお母さんにチラシを見せると、

「かっこいい。しかも女子バッテリーは今までいないんじゃない。」

と言った。私はまた考えてみた。やっぱり季那ちゃんとならチャレンジしてみたいかも。

私たちの住む瀬戸内市には、今年から社会人の女子硬式野球チームができた。となりの備前市にも数年前に女子チームができたし、近くの学芸館高校でも女子野球部が頑張っている。やっぱりやるなら今だ。

「うん。やってみる。」

私は言った。女子野球をもっと盛り上げたい、そう思うと勇気がわいてきた。そしてその気持ちは季那ちゃんも同じだった。

そうと決まれば、さっそく応募ハガキ作りだ。普通のハガキに私たちの思いは入りきらない。大きな野球ボールの形に切った厚紙に、野球が大好きで女子野球をもっと盛り上げたいという気持ちをびっしり書いて送った。

それから二週間後、お母さんに電話がかかってきた。始球式バッテリーに選ばれたのだ。私はお母さんと飛びはねて喜んだ。その日から季那ちゃんといつもより長い距りを硬球で投げる練習をした。慣れない硬球に苦戦したけれど、だんだんストライクが入るようになって自信がついていった。

そしてついに当日。マスカットスタジアムに着くと、もう大勢の人が来ていた。チームのみんなも応援に来てくれて、私が緊張でお腹が痛いと言うと、

「試合前に英奈のお腹が痛いのは通常運転だから大丈夫。」とコーチが笑わせてくれた。ひかえ室に入ると立派な優勝旗があつて、かっこ良すぎて目がくぎづけになっていると、係の人が一緒に写真を撮らせてくれた。

その後グラウンドに出ると、バックスクリーンの電光掲示板に始球式の大きな文字が見え、私たちの名前があつた。それを見たたん、感動で涙が出てきた。涙が止まらずに翌日の新聞

には泣き笑いの顔が載ってしまったけれど、無事写真撮影を終え、軽くキャッチボールをした。

だんだん始球式の時間がせまってくる。決勝を戦う倉敷商業高校とおかやま山陽高校の監督が、

「百六十キロくらいの球投げたらいよいよ。」

と言って笑わせてくれ、球審は、

「おじさんも決勝戦は緊張するわ。」

と言って和ませてくれた。

いよいよ始球式のアナウンスが流れた。球審と一緒にお辞儀をして、季那ちゃんはホームベースの方へ私はマウンドへ向かった。両ベンチから、

「頑張れ。大丈夫。」

と言う選手たちの声が聞こえた。そして倉商一番の佐々岡主将が笑顔で一礼してバッテリーボックスに入ると。球審の音が響いた。

「プレイボール。」

私はいつも通り、構えている季那ちゃんめがけて思いっきり投げた。するとボールは見事に季那ちゃんのミットの中に収まった。オオーという歓声と拍手が聞こえ、季那ちゃんの手元が笑顔が見

えた。ストライクだった。

「ナイスボール。」

両ベンチから大きな声が聞こえ、ほっとした私はやっと笑顔になれた。退場の時も、選手たちが拍手と笑顔で声をかけてくれて、決勝戦に良い勢いをつけられたことが本当にうれしかった。

あれほど緊張する場所での一球勝負。選手たちはそこで甲子園をかけて戦う。私は短い時間だったけれど、一生の思い出になる貴重な経験をした。熱い熱い夏の日だった。